



東京ボランティア・市民活動センター  
**山崎 美貴子**さん

例年に比べて、今年は酷暑というにふさわしい暑さが続きました。特に、避難所においての皆様は経験したことのない蒸し風呂のような暑さのなかで毎日をお過ごしになっていらっしゃると思います。どうか、水分補給を十分にしてください。ご高齢の方、お身体の弱い方、小さな子どもたちは屋内でも熱中症になる場合があると聞いています。避難所から仮設住宅への移動が始まり、そのお手伝いも少しずつ始まっています。遠慮されないで、ぜひ、どしどし私たちを活用してください。皆様が少しでも元気になっていただく日まで皆様のそばにさせていただきます。もうすぐ新盆ですね。身近な方、大黒柱を天国に送られた皆様、悲しみが込み上げてくる時期です。心からご冥福を祈ります。



日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)  
副代表理事  
**早瀬 昇**さん

昨年7月の日経新聞・何でもランキングで「ハイキングにおすすめの高原」の1位が尾瀬ヶ原820点、2位が磐梯高原470点。共に福島県の高原ですね。おいしい桃や福島ならではの「いかにんじん」、濁音がまじる方言の温かさ…。素敵な福島に素敵な皆さんが、今、体力的にも精神的にも限界を超える苦難にあわられています。この苦難を福島県民だけが背負わされることがあってはなりません。そこで副代表理事を務めるJVCAは福島を応援させていただきます。

**リレーエッセイ**

**お盆について**

全日本仏教青年会 救援委員長 米澤智秀(曹洞宗僧侶)  
毎日暑い日が続いております。皆様元気で過ごしていますか？お盆は私たちの生活に密着している特別な期間です。四十九日を迎えてから初めて迎えるお盆を新盆と言い、特に手厚く供養をします。いわき市では、踊念仏の一種である「じゃんがら念佛踊り」が郷土芸能として伝えられ、太鼓や鉦を打ち鳴らしながら、新盆を迎えた家などを供養して回ります。3月11日に東日本大震災があり、今年の春彼岸は例年通りに供養する事が出来なかった方が多かったと存じます。そんな中、多くの精霊が新盆を迎え、特別な意味がある今年のお盆、心の中で一つの大きな区切りとなるのではないのでしょうか。

**【みんなが帰ってくるお盆】**

お盆には、先祖が自宅に帰ってくると信じられている風習が沢山あります。迎え盆と送り盆には、迎え火・送り火を玄関先で焚いたり、お墓参りをして提灯に火を付け、その明かりで足元を照らしながら、先祖を迎えあるいは送る風習があります。仏壇や盆棚には、きゅうりやなすの飾りつけもします。きゅうりは馬に見立て、先祖に早く自宅に帰ってきてほしい意味で、なすは牛に見立て、帰りはゆっくり戻っていただきたい意味があり、少しでも長く自宅にいてほしい、皆様の願いが込められています。

毎年話題となる帰省ラッシュ。高速道路や飛行機・新幹線も大混雑ですが、それでもなお人々は郷里を目指します。帰ってくるのは先祖だけでなく、離れて暮らす家族・親族・友人も故郷に戻り、懐かしい顔に逢う事が出来ます。顔を合わせ、揃ってお墓参りをすることは、自らの命の源への大切なお参りです。お盆はただの長期休みではなく、古来より伝わる、命に感謝する特別な期間です。

**【生かされている尊さ】**

先に亡くなった方への丁寧な供養を通して、お世話になった事を思い出し、今、自分が生きている事を実感します。人は一人では生きていけず、様々な恩恵を受けながら、生かされています。家族は勿論、様々なご縁のある方々、家や家財道具に食物、動植物、大地・水・電力・空気・太陽他多くのもののお蔭で生かされている有難さに気がきます。そして、この地球上に人類が誕生してから一度も途切れる事無く、子から孫、孫からひ孫へと、先祖から子孫へと命のリレーがずっと続けられてきたお蔭で、今の私達の命があります。この世に生まれてきた事、命の尊さに気付くのもお盆です。

命には限りがあり、たった一度の人生を私達は生きています。せっかく両親からいただいた先祖からつながるこの命、先に亡くなった方分まで精一杯みんなで生きていければと思います。私共ボランティアセンタースタッフも、少しでもお力添えが出来ればと、未永くお手伝いをさせていただきます。(終)

**ボランティアの皆さんへ**

**今まで以上に、事前の情報収集が大切です**



最近、各市町村の災害ボランティアセンターでは、こんな声がよく聞かれます。

- 「泥かき」の活動だろうと思って、しっかり服装や持ち物を整えて来たのに、「泥かき」のニーズはもうないとのこと。紹介されたのは、屋内での写真の洗浄作業だった。せっかく準備してきたのに・・・。
- もう8月、さすがに「泥かき」や「ガレキの片付け」は終了しているだろうと思って来てみたら、違っていた。どうしよう、準備してこなかった！
- これからは仮設住宅での活動だ！と思い込んできたのに、まだ入居が進んでいないらしく、思ったような活動ができなかった。福島県では、津波の被害に遭った沿岸部の多くは、警戒区域や緊急時避難準備区域に指定されており、もちろんボランティアも立ち入れないため、岩手県や宮城県に比

べると、「泥かき」作業が終わるのが早い傾向があります。テレビなどで岩手や宮城のボランティア活動の様子を見て、そのつもりで来ると、福島県の場合はかなり状況が異なっていることもありますので、注意しましょう。

一方、避難区域などの指定に変化が現れると、8月以降も新たな「泥かき」ニーズが発生することも考えられます。

さらに、仮設住宅の建設状況や入居状況も、地区によって大きく異なりますので、準備してきた活動(企画)を行おうとされても、現地のニーズと合わないことがあります。

被災された方の住まいや暮らし方、そして必要とされる支援が、お一人お一人で異なってきた時期です。これまで同様、いやこれまで以上に、事前に各地の災害ボランティアセンターのホームページ等で状況を確認してから、現地に向かいましょう。

**こんにちは、生活支援相談員です！**

**「生活支援相談員とは」**

仮設住宅に入居された方の中には、「土地勘がない」「知り合いがいない」「何かあったときにどこに相談すればいいのわからない」など、暮らしに不安を感じている方も多く思われます。こうした方々の相談にのったり必要な情報を提供したり、またコミュニティづくりの支援をするのが、生活支援相談員です。福島県内の各市町村社会福祉協議会で157人が採用予定です。すでに、生活支援相談員による



訪問活動をが始まっている地域もあります。このコーナーでは、次号から、生活支援相談員の方々に登場していただき、訪問活動を通してのメッセージを紹介してもらいます。ご期待ください。



**編集後記** 原発事故は先が見えませんが、それでも仮設住宅などへの入居は進んでいます。今後当センターは、事態の推移に合わせ、生活復興支援活動に重点をシフトしながら、被災者の方々に寄り添っていきます。「一寸延びれば尋延びる」。うつくしまは、負けないぞ！(岩下)



がんばろう、福島。

最新情報はホームページで  
ご覧ください！  
<http://www.pref-f-svc.org>



次号は9月5日発行です